日本発生生物学会
〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1
東京都立大学生物教室内
日本発生生物学会の諸組織は以下のとおりです

<table>
<thead>
<tr>
<th>会長</th>
<th>〒194 町田市南大谷11</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>三菱化学生命科学研究所 発生物学研究室</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>加藤微裕（電話 0427-26-1211 内線244）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D G D 編集主幹： 〒812 福岡市東区箱崎6-10-1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>九州大学理学部生物学教室</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山名清隆（電話 092-641-1101 内線4408または4410）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>D G D 編集幹事： 〒730 広島市中区東千田町1-1-89</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>広島大学総合科学部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>天野 実（電話 0822-41-1221 内線357）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>事務局： 〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>東京都立大学理学部生物学教室</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（電話 03-717-0111 内線 364, 365）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（幹事長） 篠沢 信雄</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（会計幹事） 上原伊佐織</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（庶務幹事） 矢崎 育子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学会センター： 〒113 東京都文京区早稲田2-4-16</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学会センタービル内日本学会事務センター</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>日本発生生物学会係（電話 03-815-1903）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

入退会、会費納入および出版物（D G D、サーキュラー等）の郵送については、上記学会事務センターに書面で御問合せ下さい。
1. 第30回運営委員会報告

第30回運営委員会は、昭和59年1月11日（1:30〜4:20）東京都立大学 学館で行なわれた。出席者：加藤淑裕（会長）、江口吾郎、岡田節人、岡田益吉、酒井光一、杉山 勉、鈴木義昭、
竹内雅俊、竹内知夫、平木幸男、星 元起、水野丈夫、山名清隆（D G D編集主幹）、
米田満樹（以上運営委員）、栢山雄雄（学術会議）、天野 實（D G D編集幹事）、栢沢 富雄、上村伊佐緒、矢崎篤子（以上事務局）

議事、報告は下記の通り。

1. 昭和58年度活動報告が承認された。58年11月末日の会員数は、通常会員674名、贊助会員13件である。

2. 昭和58年度決算および59年度暫定予算が別表の通り承認された。成茂科学機器研究所からの寄付（58年50万円、59年50万円）は特別会計とした。

3. 昭和59年度事業計画

i）山田科学財団推せん候補者3月中旬決定

ii）第17回日本発生生物学会大会は5月12日〜14日、熊本大学で開かれる。
なお、大会当日グループで会合の希望のある場合は大会本部において部屋を準備する用意があることが大会委員長より書面で伝えられた。

iii）次期（昭和60〜61）会長、運営委員選挙（59年8月〜10月）

iv）D G D発行計画について山名主幹より説明された。編集委員会より提案された
無料ページ数の引き上げについては討論の末、財政上の実現を考慮し、再度編集委員会で検討することとなった。

4. 成茂寄付（毎年50万円）の用途について

国際交流のために使うこととなり具体的なとり決めは、加藤会長、平木運営委員、栢沢幹事長の3氏に委された。

内容としては、大会特別招待講演、国際学会への参加費用の援助等が話題となった。

5. D G D編集主幹、編集幹事は引きつづき山名清隆（主幹）、天野 實（幹事）の両氏にお
引受け願うことになった。

編集委員12人のうち3人は、会則による選挙の結果、以下の3氏に決定した。
岡田節人、杉山 勉、鈴木義昭

6. 昭和58年度の会計監査は鈴木明郎（熊大）、満口 元（立正大）の両氏に委嘱することに
なった。

7. その他

i）D G Dの寄贈、及び雑誌交換は原則として一切行わないことが確認された。

従来行われてきた寄贈、交換もこの方針にしたがって見直すことになった。

ii）会費滞納者の取扱い
滞納が3年に及んだ時、その旨を通知後退会させることに決定した。
1年滞納した場合、DGDの発送を停止することは従来通り。

iii）学術会議報告
従来通りの方法による会員選挙が中止になったことに伴い、現会員の任期が1年半延長された。この間に新しい選出方法について検討がなされるが、学会推せん側が主となるようであることが報告された。

別表
昭和58年度貸借対照表

<table>
<thead>
<tr>
<th>借 方</th>
<th>科 目</th>
<th>金 額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>(資産の部)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学会事務センター預け金</td>
<td>2,909,051</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>現金</td>
<td>52,960</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>銀行預金</td>
<td>287,413</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>郵便振替</td>
<td>57,069</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>郵便貯金</td>
<td>18,602</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合 計</td>
<td>3,325,095</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>貸 方</th>
<th>科 目</th>
<th>金 額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>(負債の部)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>前受会費（'84）</td>
<td>1,994,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>仮受金（東急観光）</td>
<td>50,400</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>2,044,400</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（正味財産の部）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>前年度操越金</td>
<td>321,468</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>本年度欠損金</td>
<td>△370,773</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>△49,305</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>基金（特別会計）</td>
<td>1,330,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>3,325,095</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

昭和58年度決算
（一般会計の部）

<table>
<thead>
<tr>
<th>収 入</th>
<th>金 額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学会費</td>
<td>5,151,650</td>
</tr>
<tr>
<td>DGD売上げ</td>
<td>3,677,000</td>
</tr>
<tr>
<td>広告代</td>
<td>459,000</td>
</tr>
<tr>
<td>賞助会費</td>
<td>220,000</td>
</tr>
<tr>
<td>文部省助成金</td>
<td>4,070,000</td>
</tr>
<tr>
<td>超過貯代</td>
<td>1,296,000</td>
</tr>
<tr>
<td>特別会計からの借入</td>
<td>49,305</td>
</tr>
<tr>
<td>利息</td>
<td>10,001</td>
</tr>
<tr>
<td>雑収入（要旨集売上げ他）</td>
<td>55,573</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>支 出</th>
<th>金 額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>DGD印刷製本費</td>
<td>9,120,000</td>
</tr>
<tr>
<td>銘集局経費</td>
<td>2,960,000</td>
</tr>
<tr>
<td>事務局経費</td>
<td>186,573</td>
</tr>
<tr>
<td>運営委員会経費</td>
<td>346,066</td>
</tr>
<tr>
<td>大会講演要旨雑印刷費</td>
<td>504,000</td>
</tr>
<tr>
<td>大会援助費</td>
<td>250,000</td>
</tr>
<tr>
<td>サーキュラ印刷費</td>
<td>300,000</td>
</tr>
<tr>
<td>学会事務センター発送費</td>
<td>720,060</td>
</tr>
<tr>
<td>通経費</td>
<td>55,990</td>
</tr>
<tr>
<td>事務委託費</td>
<td>809,348</td>
</tr>
<tr>
<td>出納事務費</td>
<td>30,000</td>
</tr>
<tr>
<td>DGD保管料</td>
<td>23,400</td>
</tr>
<tr>
<td>郵便振替手数料</td>
<td>1,160</td>
</tr>
<tr>
<td>銀行振込手数料</td>
<td>3,400</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>14,988,529</td>
</tr>
<tr>
<td>---</td>
<td>---</td>
</tr>
<tr>
<td>前年度繰越金</td>
<td>321,468</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>15,309,997</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（特別会計の部）

<table>
<thead>
<tr>
<th>収入</th>
<th>支出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>寄付</td>
<td>605,000</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>605,000</td>
</tr>
<tr>
<td>前年度繰越金</td>
<td>725,000</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1,330,000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

昭和59年度暫定予算
（一般会計の部）

昭和59年1月11日

<table>
<thead>
<tr>
<th>収入</th>
<th>支出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学会費</td>
<td>5,000,000</td>
</tr>
<tr>
<td>D G D印 上げ</td>
<td>3,680,000</td>
</tr>
<tr>
<td>広告代</td>
<td>350,000</td>
</tr>
<tr>
<td>費助付</td>
<td>200,000</td>
</tr>
<tr>
<td>文部省助成金</td>
<td>4,070,000</td>
</tr>
<tr>
<td>超過預代</td>
<td>1,500,000</td>
</tr>
<tr>
<td>特別会計からの借入</td>
<td>399,000</td>
</tr>
<tr>
<td>利息</td>
<td>10,000</td>
</tr>
<tr>
<td>雑収入（要旨集売上げ他）</td>
<td>25,000</td>
</tr>
<tr>
<td>送金手数料</td>
<td>4,000</td>
</tr>
<tr>
<td>予備費</td>
<td>100,000</td>
</tr>
<tr>
<td>退挙費用</td>
<td>50,000</td>
</tr>
<tr>
<td>名簿作成費用</td>
<td>135,000</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>15,234,000</td>
</tr>
<tr>
<td>前年度繰越金</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>15,234,000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（特別会計の部）

<table>
<thead>
<tr>
<th>収入</th>
<th>支出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>寄付</td>
<td>500,000</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>500,000</td>
</tr>
<tr>
<td>前年度繰越金</td>
<td>1,280,695</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1,780,695</td>
</tr>
</tbody>
</table>
2. 金谷晴夫氏逝去

日本発生物学会の運営委員及びDGJの編集委員として、長い間ご活躍いただいておりました金谷晴夫氏（基生研）が去る2月13日に亡くなられました。

慎しんで哀悼の意を表します。
なお、金谷氏の死去による運営委員の欠員は今夏行われる委員選挙まで補充しない予定です。

3. 金谷晴夫さんを偲んで

平 本 幸 男

去る2月13日金谷晴夫さんが脳腫瘍で亡くなった。誕生日を10日過ぎたばかりの54歳という若さであった。金谷さんは甲南高校、東大動物学科、同大学院をへて、昭和32年東大三崎臨海実験所に助手として就任された。その後東大海洋研究所の助教授、教授をへて、昭和52年基礎生物学研究所（基生研）の最初の教授として就任し、発生生物学系生殖部門を担当することになった。昨年4月、桑原所長の後任として2代目の基生研の所長となり、新たな決意をもって研究所の運営と発生生物学の研究にあたってゆこうとしたところ、7月に病を得て不帰の人となった。

金谷さんは初期にブラリア再生に関する研究があるが、1962年以降行われたヒトデを使っての卵成熟機構に関する研究が発生生物学上の大きな成果として世界的に認められている。この研究は金谷さんが三崎就職時、Chaetらが行ったヒトデの神経抽出物が卵成熟作用をもっているという報告に興味を持ったことから始まるが、金谷さんはその適確な判断力と深い研究の努力によって、発生における最初のプロセスである卵成熟の機構を次々と明らかにしていった。金谷さんの研究によれば、放射神経の支持細胞中に含まれる顆粒内に存在する生殖核刺激物質（GSS）が卵巣中の成熟卵細胞に作用して卵成熟誘起物質（MIS）を生成分離させる。MISは先母細胞に作用して細胞内に卵成熟促進因子（MPF）を生成させ、さらにこれが卵巣細胞の崩壊に始まる卵の成熟および受精能の獲得をおこさせる。またMPFによる卵表面の構造変化の結果、卵巣細胞の崩壊が卵表面からはなれて卵巣層が崩壊し、卵巣卵層の収縮によって生殖孔から放出される。金谷さんは7,000匹余りのヒトデから取った放射神経を東大の田村三郎教授の研究室の協力によって得られた結果、GSSは22のアミノ酸残基よりなる分子量約2,100の単一ペプチドであることを明らかにした。無脊椎動物で発見された最初のペプチドホルモンである。また彼は東北大の中西秀蔵教授の研究室の協力によってMISが1-メチルアデニンであることを明らかにした。

さらに彼は協同研究者とともに細胞内注射法によって、1-メチルアデニンが卵母細胞の外から卵巣表面に作用して内部に卵成熟促進因子（MIS）を産生させることを明らかにした。MPFは卵母細胞内で増幅して一定値に達すると成熟分裂の開始および卵表面の変化をひきおこす。MPFは脊椎動物を含む多くの動物卵でその作用に互換性があり分子種が全く同じであるかどうかは不明であるが、成熟分裂および有核分裂に共通した細胞分裂誘起物質であると考えられる。これら
一連の研究によって金谷さんはビオ11世金メダル、日本動物学会賞、松永賞、中日文化賞などの賞を受け、また昭和56年にはフランス共和国科学アカデミー外国人会員に推挙され、昨年11月には文化功劳者として顕彰された。

金谷さんは“人使い”のたいへんうまく人で、これは彼の研究の発展にも非常に役立てていた。研究の目的に沿って研究室のメンバーが、それぞれの持ち味を発揮して協力していたのは勿論であるが、他の研究室の人達、同僚や先輩までを彼の研究に引き入れて、その能力技術をフルに生かして研究の発展に貢献させたのも彼の人がらと能力によるものであった。例えばMISが1-メチルアデノシンであることを同定した研究では中西先生の研究室の協力が不可欠のものであったろう。また彼は他研究室におけるすぐれた技術を自分の研究室のメンバーに習得させてそれぞれのエクスペリエンスにすると同時にそれによって研究を発展させた。岸本雄雄君にマイクロインジェクション技術を習得させることによってMPFの研究を今日のレベルまで進めることができたのもその例である。

金谷さんが新しい研究所の構想に強く興味を持ったのは15年ほど前、大学紛争の頃であったと思う。当時海洋研の助教授であった彼が設備も内容も欧米の一流研究所に匹敵する新しい研究所に大きな期待をもっていることを何度も聞かされたことを覚えている。昭和46年の秋、私はある会合の席上で桑原厚寿太郎先生に金谷さんが新しい研究所の設立に強い熱意と実行力をもった人物であることを話した。先生は彼についてあまり御存知なかったが、彼はその年の暮にには桑原実行委員会のメンバーに加えられ、研究所設立の準備に奔走することになった。昭和51年には研究所設立のための調査室ができて金谷さんはその教授となり、さらに翌年基礎生物学研究所（基生研）が設立されるに及び最初の教授として生産部門を担当し、同時に発生生物学系主幹となった。昨年4月桑原先生が所長をおやめになったのも、所長となり、基生研の第2期の発展のためその手腕が期待されていたところであった。昨年7月から体の不調を訴えられ、7箇月の開病のすえ亡くなられた。金谷さんとしても研究所の発展のための新しい構想を持ち、これからその実現にむかって着手しようというところで、さぞかし残念であったと思う。亡くなられる10日ほど前に病院にお見舞いに行った時にも意外に元気で、研究のこと、研究室の人事のことのほか、基生研の将来構想についても熱心に話しておられた。

金谷さんは酒を愛し、マーチャンを好み、また文学青年でもあった。若い頃、彼が投稿した詩のない同人雑誌をもらったことがある。最近は忙しくなってマーチャンの牌を手にすることは殆どなくなったが、酒の方は発病直前まで相変わらずの調子であった。こういった面も発生生物学の研究や研究所や文部省関係における行政的能力とともに彼がたいへん魅力ある人物として多くの人達から敬愛されていた原因であろう。研究とアドミリストレーションの両方に対してこれから新たな発展をなしとげようとした際に亡くなられたことは、日本の生物学、特に発生生物学にとって大きな損失である。心から冥福をお祈りしたい。
4. DGD編集委員決定

昭和59年、60年のDGDの編集は運営委員会で選出された3名（岡田節人、杉山 勉、鈴木義昭）の他、次の9名の方々に決った。

Igor Dawid, 藤沢 誠, 古谷雅樹, 平本幸男, 青野義信, 片桐千秋, Thomas E. Schroeder,
竹内郁夫, 御子柴克彦

5. DGD発送変更のお知らせ

すでに手許に届けられた26巻1号より、DGDは、大学印刷から直接各会員に発送されることになりました。

出来上った雑誌を出来るだけ早く会員に配布するためです。会費請求他学会よりの連絡は従来通り学会センターが行います。入会申込み、所属・住所変更、退会の通知等は、全てこれまで通り学会センターへ送って下さい。

6. 日本学術会議第92回総会（臨時）報告

——新極面を迎えた日本学術会議——

日本学術会議広報委員会

日本学術会議の第92回総会（臨時）は、連合部会、部会、各種の委員会を含め、1984年1月18日から20日の3日間開催され、それぞれ、162名、174名、158名が出席した。

第1日目の午前中は総会と連合部会が開かれ、総会では塚田会長が経過報告を行った。報告の主な内容は日本学術会議法の改正についてである。改正法案は、第100回国会で審議されることが決まっていたが、1983年11月2日になって衆議院文教委員会が自民党単独で開かれる。塚田会長、池田会員（第1部）、向柳隆子が参加人として出席した。会長からは、改正法案についての日本学術会議での審議の結果を報告し、他の2人の参考人とともに慎重審議を要望したが、文教委員会では同日一部修正（会員の任期を第12期にかぎり1年以内延長の原案を1年半以内延長とする）の上で可決、衆議院本会議でも11月17日に可決された。この改正法案は参議院に送られ、11月24日に対教知事会で、また、衆議院解散直前の11月28日に参議院本会議で附帯決議を付けて可決、成立した。この過程で、会長は、発表したが、総会においても、「異常な事態の国会において、慎重な審議が行われず、日本学術会議法の重大な改正が行われること」に遺憾の意を表明した。会長提案については、第13期会員選挙中止の極論、新聞報道を巡る問題点などについて質疑議論がなされた。

次いで、桑野第2部長、杉本第5部長司会の連合部会で、「日本学術会議法の改正にあたって（見解）、また1月19日に本来は延期が終わる第12期の今後についての「任期延長後の活動方針（申し合わせ）」、「規則等策定委員会の設置」の三提案について、塚田会長、渡辺副会長から説明があり、質疑が行われた。
「見解」の採択と三役の再選

第 2 日目の午前中の総会では、「日本学術会議法の改正にあたって（見解）」が会長から提案され、活発な質疑討論が行われた。

見解案は、前半において、日本学術会議改革問題の経過を述べ、1) 自主改革「要綱」の公選制の原則が、政府、国会のレベルで受け入れられなかったこと、2) 政府の「改正法案」を前提としても慎重な審議が尽くされたとは言い難いこと、3) 多くの有権者や学協会の意見が十分に聴取されるに至らなかったこと、4) 第13期会員選挙が中止され有権者や立候補者の期待が満たされなかったこと、について遺憾の意を表明したものであった。見解案の後半は、新法成立という新しい状況の下で、日本学術会議の恒常的な仕事の遂行とともに、第13期以降の日本学術会議の新しい体制を作り出す任務の遂行に努力しなければならないこと、新法の枠の中に日本学術会議本来の精神を盛り込むことが重要課題であること、を述べ、新しい課題の遂行には、多くの困難があるが、あえてこの事態を乗り越えなければならないとしている。政府に対しては、日本学術会議との十分な協議、必要な予算措置について要望し、最後に、学・協会、科学者に協力を要望するものである。

見解案の後半については、「事実と違い、科学者に申し訳なし」にとどめよ、有権者に対して謝意を表せよ、政府・国会に対し別に抗議声明を用意せよ、これまでの責任の所在を明らかにせよ、選挙中止後の責任ある処理の必要がある、変節の文章となっているのではないか、など多数の疑問を述べられ、岡倉会員（第2部）他数名の会員と第3部会員有志共同の修正意見が文書で説明されるなどの経過の後、会長原案の手直しがされることとなった。休憩の後、午後、会長から原案の大筋の論旨に基づき大幅な字句修正の上で新提案がなされ、圧倒的多数で可決された。

続いて、小寺明会員（第4部）の退職について、審議の上、投票により可決承認された。

次に、会長・副会長が本来の任期満了のこの日、けじめを明らかにするために、辞意を表明、川合第1部長が議長となって、意見交換の後、辞任を承認し、改選の投票を行った。投票の結果、坂田会長、渡辺副会長、藤巻副会長が、それぞれ再選された。

規則等策定委員会の設置を決定

第3日目は、前日の記録の豪雪にもかかわらず、10時10分から総会が開かれ、1) 任期延長後の活発めげ（申し合わせ）と2) 規則等策定委員会の設置という2つの会長提案について、渡辺副会長の説明の後、賛否討論が行われた。1) は、任期延長期間を過渡期とし、その間の任務は、日本学術会議本来の諸業務の遂行と、第13期以降の新しい体制の準備である。したがって政府との協議、規則等策定委員会の設置、各部、運営審議会、常置委員会、特別委員会、研究連絡委員会、研究連絡会、地方区などの在り方についての申し合わせであり、2) については、規則等策定委員会の構成、会長・副会長運営審議会同委員会との関係などについて、活発な討論の後、会長から修正の上再提案され、絶対多数で可決され、日本学術会議は第13期へ向かって過渡期に入った。
7. 山田科学振興財団、昭和59年度来日、派遣、集会の援助申請について

山田科学振興財団に申請出来る援助についてお知らせいたします。必要書類は直接、財団宛に
請求して下さい。

宛先 財団法人 山田科学振興財団
〒544 大阪市生野区巽4-8-1 (ロート製薬株式会社内)
電話 大阪 (06) 758-1231 (ロート製薬株式会社呼出)

<table>
<thead>
<tr>
<th>援 助 名</th>
<th>募 集 開 始</th>
<th>締 切 日</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>来日（通例3ヶ月以内）（60年4月-61年3月分）</td>
<td>59年4月1日</td>
<td>59年11月30日</td>
</tr>
<tr>
<td>長期間派遣（通例1ヶ月間）（60年4月-61年3月分）</td>
<td>59年4月1日</td>
<td>59年11月30日</td>
</tr>
<tr>
<td>短期間派遣（通例3ヶ月以内）（例：59年10月出発の場合59年6月15日が締切日）</td>
<td>出発日の4ヶ月前の15日が締切日</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学術交流集会（50年4月-61年3月分）</td>
<td>59年4月1日</td>
<td>59年9月30日</td>
</tr>
</tbody>
</table>

研究援助については、改めてお知らせします。（募集開始59年9月）

8. 会員異動 58年10月～59年1月

＜新入会員＞
木村友厚 阪大・医・整形外科  ①軟骨・骨形成
                                      ②主に器官・家児

中沢透 東邦大・理・生  ①受精前後の発生開始メカニズム・形態形成過程の
                                      生化学的解析・系統発生的な変化とメカニズム
                                      ②ウニ、ヒトデ、カブトガニ、コオロギ、アリマキ、
                                      ツメガエル

橋戸和夫 キッセイ薬品工業㈱  ①受精卵初期発生及び着床に対する薬物の影響
                                      ②マウス・ラット

橋本長四郎 成城大  ①マウス受精における卵子と卵管のかかわり合い
                                      ②マウス

＜住所変更＞
阿形浩和 基礎生物学研・発生 京大・理
角川裕造 基礎生物学研・形態形成 名大・理・分子生物
小林幸哉 名大・医・二解 北大・歯・口腔二解
佐々木 一 〒509-02 可児市今渡1260-1 名大・理・生
佐 藤 正 典 鹿大・理・生
崎 山 妙 子 四天王寺国際仏教大 四天王寺女子大
只 野 柳 〒5027成阜市三田洞東2-3-9 名大・医・二解
古 沢 満 第一製薬会中央研究所・分子生物 大阪市大・理・生
丸 山 雄 造 長野県がん検診救急センター 信大・医・附属病院中央検査部
安 田 惠 子 奈良女大・理・生 近畿大・医・一解

＜退会会員＞
入 江 伸 宮, 石 井 三 郎, 三分一 隆, 末 光 隆 志, 高 谷 博
広 田 希 郎 (58.8.10逝去) 宮 本 さ ち
アロカ鹤 (贊助会員), 菅原理化観察業所 (贊助会員), ヤマト科学名古屋営業所 (贊助会員)

[贊助会員]五十音順

株式会社 小澤製作所豊田営業所 (〒471 豊田市広久町5-27-4)
合資会社 木下理化学製造所 (〒460 名古屋市中区千代田5-22-11)
グリーン洋書株式会社 (〒211 川崎市幸区小倉 610-1-506)
株式会社 商新名古屋営業所 (〒462 名古屋市北区暖通町1-6 志賀コーポ101)
日製産業株式会社 (〒453 名古屋市中村区名駅4-6-18 名古屋ビル)
株式会社 培風館 (〒102 千代田区九段南4-3-12)
ベクトン・ディッキンソン・オーバーシーズ・インコーポレイテッド
(〒107 港区赤坂8-5-34 島藤ビル)
三菱化成生命科学研究所 (〒194 町田市南大谷11号)
理工学社 (〒113 文京区本駒込5-9-10)
和研産株式会社 (〒606 京都市左京区北白川西伊根町25)
中標津血清

ライフインダストリーの三菱化成が採血から製造まで一貫国内生産
最終洗浄は孔径0.1μmのメンブレンフィルター使用

準胎児血清
生後24時間以内で初乳を飲む前の新生仔牛から採血

新生仔牛血清
生後2週間以内の新生仔牛から採血

成牛血清
1.5才以上の牛から採血

ARMOUR血清
Armour Pharmaceutical Company (U.S.A.) 製造

胎児血清
(Rehautin® F.S.)

仔牛血清
生後16週間以内の仔牛から採血

何れもロットチェック用サンプルを提供致します。

三菱化成工業株式会社 医薬事業部
〒100 東京都千代田区丸の内2-5-2(三菱ビル)
☎03(283)6791(直通)

大阪支店化成品部門 ☎06(268)4560(直通)

東京支店化成品部門 ☎03(283)6100(直通)

名古屋支店化成品部門 ☎052(252)2556(直通)

九州支店化成品部門 ☎092(251)6894

— 10 —
高圧蒸気滅菌可能な組織培養用粉末培地の
バイオニア日水製薬

日水製薬が高圧蒸気滅菌可能な組織培養培地を開発し、
日本で特許品として広めてから約10年。
成分、細胞増殖支持力を損なうことなく、
大量かつスピーディーに高圧蒸気滅菌できる日水の組織培養培地は、
バイオテクノロジーの研究が活発を浴びている昨今、時代の要求に応えました。
日水製薬は、常に先駆者として、
すくれた組織培養培地の開発に取り組んでおります。

<table>
<thead>
<tr>
<th>日水の高圧蒸気滅菌可能な組織培養培地群</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>イーグルMEM培地</td>
</tr>
<tr>
<td>RPMI 1640培地②</td>
</tr>
<tr>
<td>イーグルBME培地</td>
</tr>
<tr>
<td>ダルベッコ変法イーグル培地②</td>
</tr>
</tbody>
</table>

日水製薬株式会社
本社 〒170 東京都豊島区高幡2-11-1
電話 03(398)8801(代)
営業所 東京・大阪・名古屋・広島・横浜・仙台・札幌

高圧蒸気滅菌可能な培地についてのお問い合わせは、上記に
シグマ製品がグ～ンとお求めやすくなりました。

日本特殊薬品では、アメリカ・シグマ社と代理店契約を結び、シグマ社最新カタログの全製品を、下記の要領で簡単にお求めいただけます。

●シグマ社の製品価格は、ご使用者への直接販売にかぎります。●注文時の注文品に、定価で発送いたします。少量の場合には、代金引換えにてお受け付けすることがあります。●注文はできるだけ常勤でお願いしますが、品切れの場合は約1か月のうちに取り寄せます。（注：指定のとき約2か月後）

お問い合わせは下記へ

日本特殊薬品株式会社
大阪市西区京町地1丁目8番22号（〒550）☎06（448）2261（代表）
郵便局番号（〒530-91）大阪中央局第755号
We have cultured
Human, Rat, Mosquito...
本邦初の分担執筆による画期的な発生学書完成

臨床人体発生学 先天異常の理解のために

編著・岡本 直正
共著・大沢 智三
武藤 昌
佐藤 幸男
藤本十四秋
谷村 容
池田 高良
安田 峯生
中村 和成
田中 修

広島大学教授
名古屋大学教授
広島大学教授
名古屋大学教授
広島大学教授
早稲田大学教授
長崎大学教授
元鳥居医科大学教授
鳥取医科大学教授

従来の正常発生中心の発生学を、臨床に直結する先天異常との相互理解で解釈。

執筆陣は解剖学から病理学、生物学まで関連領域にて先天異常研究の第一人者で構成。

豊富な2色イラストで立体的に図解し、発生段階の貴重な写真も随所に収載。

索引は、発生学用語を網羅し、和文欧文を併記した。

本書は、正常発生過程とは異常発生過程との相互関連において理解することが最も有効であるという観点から企画され、各種疾患の本質を理解するために必要不可欠なものである。発生学は分子生物学、細胞遺伝学、胎生病理学、先天異常学、臨床発生学などの関連領域を含めて理解されるべきで、本書はそれぞれの専門領域の立場から先天異常の研究を行っている諸先生方に執筆に加わっていただき完成した。従来の著書とは異なった内容を含んでいる発生学書である。

主要目的

遺伝情報の伝達
複製・転写・翻訳・発生分化とその調節
染色体と染色体異常
染色体研究の発展の歴史／染色体と遺伝子／染色体の形態／分化法による染色体の識別／染色体と細胞分裂・性染色質とLyon現象／染色体異常の原因／染色体異常の発生学的意義／染色体異常による疾患
生殖細胞の形成から胚発生
胎生動物としてのヒト発生の概観／生殖細胞の起源および分化／成熟分裂（減数分裂）／受精から着床まで／内細胞帯の分化
胚の形成／胚胎形態系の分化
胚の形成あるいは細胞膜の発達／胚の初期分化と胚子形成（胚芽形成）／胚の分化と胚子形成／胚／胚の形成と胚子形成（胚芽形成）／胚の形態形成（胚／胚の形態形成）／月齢別発育の概要
胎生期の発育
胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育／胎児の発育
### NK式電気低温恒温器（送風循環型）
#### 高精度普及型

<table>
<thead>
<tr>
<th>型式</th>
<th>LP-100</th>
<th>LP-150</th>
<th>LP-200</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>仕様</td>
<td>-5℃-45℃</td>
<td>-5℃-45℃</td>
<td>-5℃-45℃</td>
</tr>
<tr>
<td>内法</td>
<td>600×360</td>
<td>650×380</td>
<td>600×410</td>
</tr>
<tr>
<td>波長</td>
<td>360×450</td>
<td>360×670</td>
<td>600×670</td>
</tr>
<tr>
<td>温度範囲</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
</tr>
<tr>
<td>価格</td>
<td>26万円</td>
<td>30.5万円</td>
<td>32.5万円</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※その他のいくつかのタイプがあります。

### NK式プログラム電気低温恒温器（送風循環型）
#### 四季の温度プログラムで自在に再现できます！

<table>
<thead>
<tr>
<th>型式</th>
<th>LP-100</th>
<th>LP-150</th>
<th>LP-200</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>仕様</td>
<td>-5℃-3℃</td>
<td>-5℃-3℃</td>
<td>-5℃-3℃</td>
</tr>
<tr>
<td>内法</td>
<td>600×380</td>
<td>650×380</td>
<td>600×410</td>
</tr>
<tr>
<td>波長</td>
<td>650×480</td>
<td>650×670</td>
<td>670×670</td>
</tr>
<tr>
<td>温度範囲</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
</tr>
<tr>
<td>価格</td>
<td>48.8万円</td>
<td>53.5万円</td>
<td>60万円</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### NK式人工気象器
#### 植物の育成、小動物（昆虫）飼育の本格派ノ

<table>
<thead>
<tr>
<th>型式</th>
<th>L.H-100</th>
<th>L.PH-100</th>
<th>L.H-100</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>仕様</td>
<td>-5℃-45℃</td>
<td>-5℃-45℃</td>
<td>-5℃-45℃</td>
</tr>
<tr>
<td>内法</td>
<td>600×350</td>
<td>630×350</td>
<td>600×350</td>
</tr>
<tr>
<td>波長</td>
<td>680×680</td>
<td>680×680</td>
<td>680×680</td>
</tr>
<tr>
<td>温度範囲</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
<td>+5℃-45℃</td>
</tr>
<tr>
<td>価格</td>
<td>47万円</td>
<td>73万円</td>
<td>65万円</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※その他のいくつかのタイプがあります。

### NK式プレハブ電気低温恒温槽
#### 組立、移設、増設が思いのままノ

#### 精密型
- L.H型+5℃〜45℃
  - 価格1坪1,190,000円より各種
- L.P型+18℃〜45℃
  - 価格1坪2,290,000円より各種

※詳細はプレハブシリーズカタログをご請求下さい。

### NK式クリーンベンチ（垂直層流型）
#### 無菌作業の能率アップにノ

- NKB-VS-850 ￥780,000
- NKB-VS-1300 ￥880,000

### NK式クリーンベンチ（垂直層流両面型）
#### 無菌作業の能率アップにノ

- NKB-VW-850 ￥1,200,000
- NKB-VW-1300 ￥1,500,000

---

日本医化器械製作所

株式会社 日本医化器械製作所

本社 〒550 大阪府泉南市戸塚町1丁目19番24号
電話 大阪 06 (443) 07128

東京営業所 〒183 東京都世田谷区田中町7 0 5 3 - 4
電話 0423 (65) 3369

工場 〒363 愛知県半田市相良町5 番地47号
電話 0563 (28) 8368
タルコンでは、新しい技術の導入と、
各専門領域における先生方のご意見を製
品づくりに反映することにより、組織培
養器具の開発・改良に意欲的に取組んで
まいりました。
それは、プラスチック上における組織培
養剤の均一処理方法のパイオニアとし
て、あるいは、高品質ブ
ラスチックの使用におけるリーディング
メーカーとして、この分野においてかず
かずの先進的な試みを実施してきたこと
にも役立っています。
よりすぐれた品質、より使いやすい機能
をお客様のために、タルコン組織
培養器具は、常に前進をつづけます。

タルコン組織培養器具は、常に前進をつづけます。